

過疎地域へのＵターン動向に関する実証的研究

豊橋技術科学大学 学生会員 ○越野 実雄
 豊橋技術科学大学 正会員 青島 縮次郎
 豊橋技術科学大学 学生会員 熊谷 慎二

1. はじめに

我が国では高度経済成長期において、都市域への人口集中、山間農村域からの人口流出が生じたが、近年都市隣接過疎地域では生活圏の広域化を背景に人口減少に歯止めがかかり、さらには一部増加に転じる町村も生じている。本研究ではこうした現象の事例として愛知県東三河山間地域を取り上げ、社会移動の正の要因である転入に焦点をあて、Ｕターン現象を中心に実証的研究を行う。

2. 調査

本研究では、東三河山間地域を南設祭郡（以下南設）と北設祭郡（以下北設）に分け、表-1に示す4調査を行った。

3. 分析

転入者アンケートにみるＵターン率（全転入者に占めるＵターン者の割合）は南設74.7%、北設67.0%であり、両地域とも転入の中心となす者がＵターン者であることがわかった。また、そのＵターン時年齢は図-1に示すように20代、30代が大半で、これはＵターン希望者のＵターン希望年齢とも一致している。以下、Ｕターン者に問題を絞り分析を展開する。

図-2はリストアップされた人のＵターン意志を示したものである。南設は仕事に問題なくＵターンできる者が30%近くいるのに対し、北設は20%と少なく、適当な仕事があればという者が過半数を占めている。そこでＵターン意志に強い影響を及ぼす仕事に関連して、既Ｕターン者とＵターン希望者の比較検討を行う。

まず図-3は、既Ｕターン者のＵターン時における職業変化をＵターン後の通勤域別に示したも

表-1 調査項目

	1	2	3	4
調査年月	昭和60年10月	昭和60年12月	昭和61年3-5月	昭和61年8月
調査対象	東三河8町村における55～60年の転入者の中、Ｕターン者各町村役場の転入届の調査、2分の1抽出、各町村に本籍をおく者	左記調査をもとに2分の1抽出し、筆頭者が男性の者	東三河8町村の全世帯の世帯主	左記調査で得られたＵターン希望者
調査方法	アンケート	アンケート	アンケート	アンケート
回収数	北設転入 (1,346世帯) 北設Ｕターン (744世帯)	総数 (208世帯) Ｕターン者 (144世帯)	全体 (886世帯, 8.1%) 北設 (334人)	全体 (247人, 28.0%) 北設 (140人)
回収率	南設転入 (897世帯) 南設Ｕターン (648世帯)	回収率 (27.4%)	南設 (631人)	南設 (107人)
主な内容	Ｕターン者の家族属性及び移動場所	属性・家族形態 通勤状況・定住意識・要望施策等	親からみた子供のＵターン意志 属性・学歴・通勤先等	Ｕターンの意志 属性・予定時期 形態・希望業 Ｕターン後の通勤可能町村等

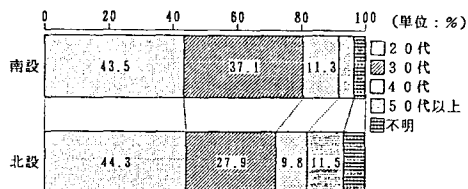


図-1 転入時の年齢（既Ｕターン者）

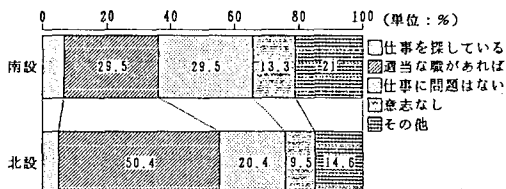


図-2 Ｕターンの意志（Ｕターン希望者）

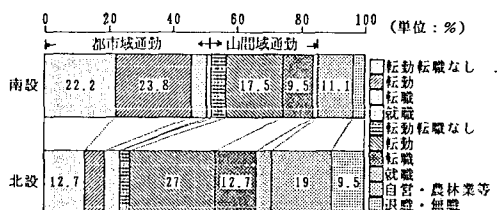


図-3 Ｕターンの型（既Ｕターン者）

の(Ｕターンの型)である。南設は、東三河都市域に隣接する条件のもとに都市域への通勤が半数近く占めるのに対し、北設ではそれが困難で山間内部での通勤又は自営・退職という型が多い。転職してのＵターンは両地域とも少なく、南設では会社員→自営が、北設では会社員→公務員等が多少目につく程度であった。この図をさらに前住地が東三河都市域であった者に限定して示したものが図-4であり、両域とも転勤・転職なしが倍に増える。このことは、近接都市域からの、就労をそのまま維持しながらのＵターンが多くなることを示している。

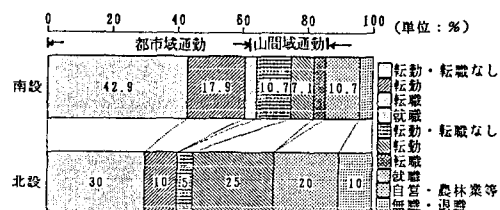


図-4 Uターンの型(既Ｕターン者-東三河都市域に限定)

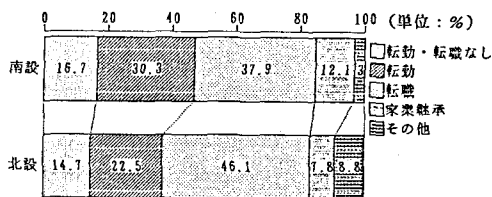


図-5 Uターンの型(Uターン希望者)

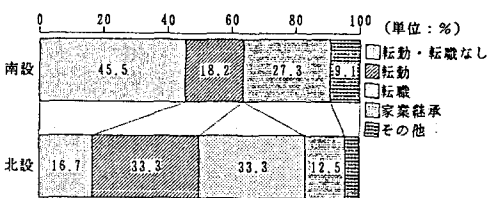


図-6 Uターンの型(Uターン希望者-東三河都市域に限定)

図-5はＵターン希望者がＵターンを考える際のＵターンの型であり、図-6は先ほどと同様、東三河都市域在住者に限定して示したものである。ただし、ここではアンケート内容により通勤域別のデータは得ていない。注目すべき点は、既Ｕターン者の状況と異なり、転職によるＵターンを考えていること(特に北設)である。つまり、この特性を持つ者を実際にＵターンさせることが可能になれば、Ｕターンが促進されるものと考えられる。

また、東三河都市域に限定した場合は南設において既Ｕターン者と同様の結果となった。さらにＵターン後の希望職種については、北設の方がややその選択に柔軟性を持っていることも別途判明した。

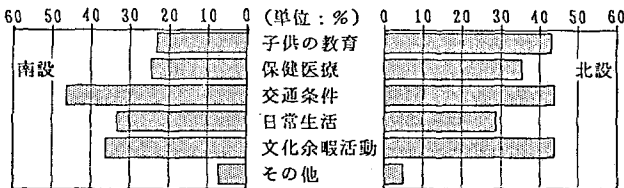


図-7 Uターンの問題点(Uターン希望者)

最後に、仕事以外でのＵターンに関する問題点についてみたものが図-7である。総数(複数回答)では、北設の方が不安を多く持っている。また南設では交通条件が突出しているがこれは南設からの通勤可能域が自町村以外では、都市域に集中していることから納得のいく結果といえる。

4. まとめ

既Ｕターン者とＵターン希望者の大きな特性の違いは職業についてである。つまり、希望者は適当な仕事があればＵターンしたいと考えているのに対し、実際にＵターンを行った者の大半は職業を変えていない。Ｕターンを促進させるには、①職業を変えずにＵターンできる状況をつくるか、②新たな雇用機会の創出が大きな課題となる。南設においては、①の条件によりかなりのＵターンが発生しており、今後は南設を媒体として東三河都市域→南設→北設という道路整備等による通勤圏の拡大を図ったり、北設を対象とした企業誘致などが有力な方策となろう。